

社会福祉士が認識する利用者のストレングスと支援方法 —地域包括支援センター調査からの分析—

○ 明星大学 山井 理恵 (1719)

浅井 正行 (明星大学・3535)、石田 健太郎 (明星大学・7331)

キーワード：ストレングス、社会福祉士、地域包括支援センター

1. 研究目的

近年、「ストレングス・パースペクティブ」のソーシャルワークが普及しつつある。一方、ソーシャルワーカーが支援を展開していくうえで、利用者のストレングスをいかにとらえ、それを活用して支援を展開しているかについては、十分な研究が蓄積されていない。

本報告では、以上のような問題意識から、地域包括支援センターの社会福祉士を対象に、彼らが利用者のストレングスをいかに認識し、さらにいかなる支援を展開しているかを明らかにすることを目的とした。

2. 研究の視点および方法

研究の視点：本研究では、ストレングス・パースペクティブから研究を行った。

方法：A市の地域包括支援センター（以下、センター）9か所の社会福祉士11名を対象に訪問面接調査を実施した。①支援困難な利用者の事例概要とそのストレングス、②比較的自立した利用者の事例概要とそのストレングス、③当該地域包括支援センターがある地域のストレングスについて半構造面接を実施した。

実施時期：調査の実施時期は、2011年9月～11月である。

分析の視点：ストレングス・パースペクティブのソーシャルワークにおける構成要素は論者ごとに差異があるが、本研究では Rapp and Goscha (2011) による生活空間の質に寄与する個人の要因（①熱望、②能力、③自信）と、環境の要因（①資源、②社会関係、③機会）をもとに検討した。社会福祉士の支援については、Nelson-Becker et.al(2006:155)による利用者の意思決定と専門職の役割を手掛かりに検討した。

3. 倫理的配慮

調査時には対象者に調査の目的や方法、個人情報の取り扱いについて説明し同意を得た。データ分析に際しては個人情報保護のため、分析に支障のない範囲で修正・省略を行った。

4. 研究結果

(1) 支援困難な利用者のストレングスと支援：支援困難な利用者については、「生きる意欲」「訴える力」「家族（親、子ども）を思う気持ち」「こだわり」をストレングスと認識し、

その気持ちにこたえるような支援を行うように努めていた。緊急時に地域包括支援センターに通報する「大家」「近隣」、緊急時等に対応する「別居中の家族」などの資源をストレングスとして認識し、彼らとの連絡を重視していた。

(2) 比較的自立した利用者のストレングスと支援：一方、比較的自立した利用者については、「自分で情報を集めサービスや事業所を選ぶ」「自分で週の計画を立てる」「悪化予防のための趣味活動やスポーツクラブへの参加」「自分が必要なだけのサービスを受ける」「仕事を継続している」「自分で対応できないときに地域包括支援センターに連絡する」などをストレングスと認識していた。そのうえで、集中的な支援を行うよりも、利用者が求めてきた情報を提供することが中心であった。

5. 考察

(1) 個人のストレングス（熱望、能力、自信）：調査対象となった社会福祉士は、支援困難な利用者については「熱望」をストレングスと認識している傾向があった。一方、比較的自立度の高い利用者に対しては、「熱望」が前面に出ることは少なく、情報を収集する力や判断力、それまでの職業生活で蓄積してきた「技能」、さらには具体的な成果が得られた「自信」をストレングスとみなしていた。

(2) 環境のストレングス（資源、社会関係、機会）：支援困難な利用者については、「資源」「機会」への接近についての言及は少なかった。ただし、在宅でかろうじて生活できている状態の利用者については、支援する別居家族や近隣住民を含む意味のある「社会関係」を有すると見なしていた。比較的自立した利用者については、目標達成に必要な「資源」や関連した「機会」への接近等の駆使により、自分から環境に働きかけるととらえていた。

(3) 支援の展開：支援困難な利用者に対しては、「自宅で生活したい」「家族を思う気持ち」などの「熱望」を受けとめながら、利用者の生命や安全を維持できるような社会資源のコーディネートを行っていた。一方、比較的自立した利用者に対しては、利用者の「技能」「自信」を活かしつつ、足りない部分の知識などを補う情報提供を中心に支援を行っていた。

(4) 結論と今後の課題：本研究で展開されている支援は、支援困難な利用者に対してはケアマネジャー的な社会資源のコーディネート・傾聴を中心とする心理的支援を実施していた。一方、比較的自立した利用者にはコンサルテーション的な支援を行っており、Nelson-Becker et. al (2006)と類似の傾向を示していることが明らかになった。今後は、利用者側から見たストレングスを促進する専門職の支援についても研究を進めていきたい。

*本研究は平成 23～25 年度科学研究費基盤 (C)「地域包括ケアにおけるストレングスを促進するソーシャルワークの総合的研究」(課題番号 23530769 研究代表者 明星大学教授 山井理恵)による研究成果の一部である。報告者以外の本調査メンバーは妹尾和美(明星大学准教授)である。